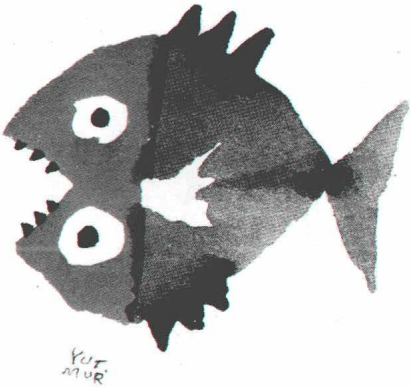
私の釣りの旅

室生朝子

私の釣りの旅



室生朝子

室生朝子（むろうあさこ）

1923年8月，室生犀星の長女として東京に生まる。
ペンクラブ，エッセイストクラブ，文芸家協会会員。
著書『晩年の父犀星』『杏の木』『父 室生犀星』『雪の墓』『猫のうた』ほか。

私の釣りの旅

昭和49年12月31日　第1刷発行

¥ 890

私の釣りの旅
著者　室生朝子
発行者　下野博
発行所　株式会社 立風書房
東京都品川区東五反田3の6の18
電話（〇三）四四七一一一九一
振替口座　東京 七四四九三
印刷所　信毎書籍印刷㈱
㈱美術出版社
製本所　㈱美成社
© Asako Muro 1975
落丁・乱丁本はお取替えいたします
Printed in Japan 0095-1255-8909

私の釣りの旅〈目次〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

I

次助さん　二
へら鮒との出会い　一六
白い鮒　三三
寒鮒　三七
はやの乱舞　三三
やまべ　三六
鯉こくとじんけん　四一
東尋坊とらっきょう　四六
鮎　五〇
相模湾のたかべ　五五

II

いのこずち　六三
草　魚　七〇
もぐっちょと行商　七八
菱の実　八六
川根の茶所　九三
五十里湖　一〇一
幻の霧積温泉　一一
間瀬湖　一一〇
梅鉢草　一一八
おいとさん　一二八
いのぶた料理　一四五

みかん山　一五四
駒ケ根の夕ぐれ　一六二
おすやまべのひれ　一七四
湯ノ川のやまべ　一七九
鮴　一八七
さくらうぐいにそえて　一九〇
ていれぎ　一九九
執念のひと　二〇六
釣り堀にて　二一三
女性の釣りの服装　二二四
あとがき　二二二

私の釣りの旅

裝幀　村上豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

次助さん

私が釣りに興味を持ちはじめたのは、油壺の小網代湾から船を出した時であった。城ケ島の北原白秋の詩碑が出来たばかりの頃、碑を見る目的で三浦半島に車で出掛けた時である。

大きい立派な碑は、波打際に天をつくように聳え、碑の裾の石組は斜めに海までとどき、波に洗われて光っていた。まだ人も沢山来ぬ頃であったから、その碑の意味は充分に味わえたし、「城ケ島の雨」の詩の内容も所を得ていると思った。だが、石組のところに詩の曲の譜面が刻まれていることが、私は気にかかった。白秋の碑にケチをつける訳ではないが、私は、譜面が刻まれていなかったなら、より一層白秋らしい詩碑になるのではないかと思った。だがそれは、多くの人々の口によって伝え唱われている詩であるから、詩碑の製作者の希望

であったのではないかとも、理解出来たのである。このようなことは、誰の文学碑にでもあることで、それぞれの主観的な考え方があるから、やむをえないであろう。

油壺のレストハウスで昼食のさざえの壺焼などを食べている時、隣の席から「この間の大漁云々……」と話しているのが耳にはいって来た。私は早速訊ねてみた。此処の崖の下に漁師のたまり場があって、其処から釣りの船が出ることを知った。今まで竿を持ったことのない私は、好奇心から船を頼んだ。

年をとった次助さんという船頭は、潮焼けした顔を柔かくほころばせ、艫を持った。船の舳に立つ次助さんの姿は、実にたくましく、また頼もしくも見えた。私は船には酔わない自信はあったものの、泳げないということのひけめが、徐々に恐怖心に変っていった。風はなく海は凪ぎ、船も揺れない。私は何度も次助さんに、船はひっくりかえらないかと聞いた。その度に次助さんは面倒な顔もせず、

「今日ぐらい海の静かな日は滅多にない。はじめて釣りをする人には、まったくよい日だ。船のことは心配しないで、安心して釣りを楽しみなさい」と言った。

次助さんは船に乗る前に、岩穴のような小屋から、ゴカイを一箱持って来た。水分を含ん

でいる砂をひっくり返して、いきのよいものを選んでくれた。ゴカイでもいきのよいものほど、魚はよく喰うのである。

入江から出てしまうと、周囲の景色がまったく違った。前方には荒崎海岸の小さい入江も見え、崖にはいくつもの横穴が並んでいた。戦争中に掘ったものが、そのままになっているとのことであった。赤い色や緑色のとんがった屋根は、その辺りの風景のなかで、現代的な匂いをただよわせていた。

次助さんは、

「五目釣りにしよう」と言った。なんでも釣りあげることを、そのようにいうのだと私は知った。次助さんは竿を用意してくれた。使いこなしてはあるが大事に扱ったあとがはっきりわかる、柔かい竿であった。しかし、ゴカイは気味が悪くて、私には鉤につけられなかったので、餌をとられる度に次助さんを、わずらわした。

初心者の悲しさは、竿の扱い方やミチ糸のたぐりよせ方もわからず、お祭りさわぎや、たぐりよせたミチ糸をこんがらかせたりすることである。次助さんはその面倒をみるのに忙しかった。しかし、いやな顔もせず、

「はじめは誰でもこのようになるんだから、気にしないで下さいよ」

と慰めてくれた。私の道具を直していると、その間に船は流されて、思いの場所に、止め

ておくことが出来ず、次助さんは残念がっていた。

私はそろそろと糸を海に入れた。重りの重さで、ミチ糸は思いがけないほどのスピードで波の中にもぐっていった。重りが「こつん」と海底に着くと、竿の先から海面までの間のミチ糸はゆるむ。次助さんに教えられた通り、二十センチほど巻きあげて、ミチ糸をピーンと張らせておいた。そして竿先をそっと上下させた。

しばらくして、次助さんは、

「竿をあげてみなさい」

と言った。魚の当りが私にはわからなかったのであろう、餌はとられてしまっていた。今度は、私は竿先と手首に、全神経を集中させた。波頭は目にチカチカと、まぶしかった。

そのうち、ブルブルッと、手首に強く当りが伝わって来た。私は思いきり竿をあげた。次助さんは、

「ミチ糸をゆるめないで、竿を右側に置いて左手でミチ糸をつかむ、つぎに船の中にミチ糸をたぐりよせるのだ」

と、掛声のように言った。私は慌てずに忠実に従った。なにがかかっているのか、というようなことを考える暇はなかった。唯、この魚を途中で逃がさないようにと、それだけであった。水深があったから、ミチ糸は足元に白い輪となって、重なっていった。相当に重いも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com